

Κ Ο Σ Μ Ο Σ

Vol. 12, No. 1 (No.37) 1977. 7. 1

図書と私自身

大学院講師・文博 しま 島 だ 田 きん 謹 じ 二

「易経」に「河出図、洛出書」の語があって、その河図と洛書のことから転用して、「図書」というと今は絵図や書物のことを一般に指すことになっている。これに対して、「書物」の定義は、綴って冊子とした本のことだと現行の辞書類は解している。地球上の人文が発達するとともに、両者はいつか一つになって、今日に及んでいるわけだから、来歴も長く、種別も豊かで、内容は千差万別である。大観すれば、宇宙とともに変転している大現象の一つで、どんな解釈をも下しうる。これに対して、はかない一微塵いちみじんともいうべき私は、どんなふうにつきあってきたろうか。学校に学んでいた頃は、師の教えるままに字句を暗記し、内容を絶対の真理として、服膺しようと務めてきた。それは近世の学堂の教訓をそのまま受け継ぐふつうのあり方であった。師の注解を文字通りに信奉したことも、ほぼ同代の人々と同じであった。どういう家系からか（恐らくある種の遺伝があるためだろう）、少年の頃から図書は愛玩した。旧制の中学生になると、特殊の専科に興味をひかれて、はやくから外国の専門誌に投稿して、意外な相手に喜ばれたこともあった。生涯の職業を定める年令になって、ただ好きだからという理由で、はじめは外国（それも東西の交渉）史にあこがれ、西洋語に通じなくてはどうにもならぬと悟って、いくつかのヨーロッパ語を解読出来るようになった。大学はただ夢のように過ぎてしまった。それが発心して、旧来の師の道から、無自覚のうちにはづれて、得手勝手なひとりの道を歩き出した。その時から数えると、半世紀に近い。

人間の生涯の実体をつくる有為転変ういてんぺんの悲哀かなしみと道理ことわりとは、一通り体得したつもりである。けれどもそばには古今東西の図書や書物がいつもやさしく待じしてくれて、色々なことを教さえし、論ろんしもしてくれた。こんなふうに戻かえりてみると、私の内部生活は、やっぱり図書というものと同棲どうすみして、あるいはしっかりと、あるいははしみじみと結ばれて、いまにはなれがたい因縁を持っている。そのことを今日改めて痛感した。

(一九七七年五月三十日)

巻頭言	1
特集 私のすすめる 一冊の本	2
夏休み貸出について	3
本学に学んだ人々⑧	4
朝霞分館	6
参考図書解題	7
日誌(52年4～6)	8

特集 私のすすめる一冊の本

今年も新学期が始まり、研究、サークル活動等々希望に満ちた日々を送っていることと思えます。さて図書館では今回図書選択委員の諸先生方にお願ひし、「私のすすめる一冊の本」と題する特集をいたしました。学生の皆さんにとって有益な指針となることと思ひます。

(注：前号のつづき、掲載は執筆者のアルファベット順・文末の記号は請求記号)

アンドレ・ルロワニグーラン著
荒木 亨 訳
「身ぶりと言葉」
新潮社 昭和48年

石田 稔二
(文学部教授)

近頃は読みかけの本がたまるばかり、積み上げられたままの本もますますたまるばかりという事情なので、ここ数年の間ということに範囲をひろげて、さてということになると、本書などは、私の貧しい読書経験の限りでは、「一冊の本」としてあげるのに十分あたいする書物であろうと思う。原著そのものも一般読者向けに書かれたもののように、「一冊の本」として一般教養に資する書として私もここにあげるわけだが、必ずしも読み易い本ではない。はずかしいことだが、ルロワニグーランという学者の名前を私は本書ではじめて知った。一流というよりも超一流の学者である。名前をつけるとすれば、人類学者である。本書の内容の紹介は不可能であるが、要するにホモ・サピエンスの壮大な進化の歴史である。その進化の過程とは、生物体としての機能が、道具や言葉、言葉の記録といった形で絶えず外化されて来た過程である。思考の緻密さ、スケールの大きさは、わが国の学者とか学問とかいうものに対する貧しいイメージを遙かに超える。本物というものは常識を超えるという意味で化物のようなものだが、読書の要諦は、本物に触れ、本物を知るというに尽きる。人との付合いにしても同じことである。(469: LA)

久枝 浩平 著
「契約の社会・默契の社会——日米にみるビジネス風土」

日経新書 昭和51年

高橋 統一
(社会学部教授)

比較文化論という学問分野は、文化という時間的・空間的に広汎で複雑な事象を比較考察するものだから

学際的領域に属し、従って方法論にまだ確たるものがなく、近来甚だ盛んなわりには学問的成果が案外乏しい。いわゆる日本文化・日本人論の多くが一見ユニークな発想でありながら、結局は実証の裏付がない事実の恣意的なよせ集めで、充分な説得力をもたぬ思いつき程度で終わってしまうのも現段階では止むを得ないことかもしれぬ。かような観点からすると本書は学問的著作といった偽装がなく、一介のビジネスマンである著者が米国での実務体験十数年で得た諸事実をふまえ、日米のビジネス慣行・制度の違いを文化伝統の相異として理解しようと試みたものである。

体系的な比較文化論とは云い難いが随所に卒直で鋭い分析があり、かなりの説得力と示唆に富み、小冊ながら今更の如く教えられる処が少なくない。

(361.6:HK)

品田 稔 著
「都市の自然史」
中公新書361

山岡 景行
(文学部助教授)

こんにちまでの数多くの自然保護論、環境論においては、人間と自然を対置し、人間を自然の破壊者として

位置付ける傾向があった。この考え方は開発の論理に取り入れられ、人間と自然、開発と自然保護を対立物とする見方に立脚したうえて開発と保護の調和が論じられ、はなはだしい場合は開発と自然保護が天秤にかけられてきた。

都市、農村を問わず、人間の生産活動は確かに一部自然を改変せずにはおかない。そして現実我国の山野は著しく人間の手による改変を受けてきている。だからといって、我々は人間を自然の対立物と頭ごなしに決めてしまうのは早計と思われる。今、我々が考えなければならないのは、人

間の生産活動とその所産、ひいては人間の存在そのものが自然系の中でどのような位置を占め、どのような役割を果たしてきたかという問題である。換言すれば、人間の住環境を維持発展させるためには人間が環境の構成要素であると同時に環境の認識主体であることを率直に認めたい。人間の存在を保障する反作用を引き起こすような環境への作用、つまり人間の生産活動のあり方を科学的に検討することが今日我々に課せられた問題なのである。

品田穰氏は上述の間に答える科学的方法論の

ひとつを提起している。同氏は都市における人間の諸活動が自然系の中でいかに営まれてきたかを、そしてその位置付けを文化史的、自然史的に総合的に捕える努力をされている。そして、「都市は人間を自然から切り離しえたか？」という問いかけを行なったのが本書である。本書は私の知る限りにおいて、自然系の中に人間を正しく位置付ける展望を読者に持たせることに成功したほとんど唯一の好書である。ぜひ多くの方々に一読をお勧めしたい。

(519: S Y)

島田謹二先生著作展観

——日本学士院賞授賞記念——

このたび、島田謹二先生（大学院講師、文学博士）の業績「日本における外国文学—比較文学研究」に対して、学士院賞が贈られ、6月13日に上野の日本学士院で受賞式が行なわれました。

図書館では、これを記念して、6月7日より21日まで、先生の著作を展示しました。

以下に展示しました著作の一部を掲げます。

〔単行書〕

『佐藤春夫詩集』（編）新潮文庫 1962

『アメリカにおける秋山真之』朝日新聞社 1969

『ロシアにおける広瀬武夫』朝日新聞社 1971

「—比較文学者の『源氏物語』観」

『講座比較文学 1』東大出版会 1973

『島田謹二教授還暦記念論文集；比較文化比較文学』弘文堂 1961

(1961年までの著作目録つき)

〔雑誌論文〕

「永井荷風の珊瑚集・—比較文学研究」比較文学研究 7 1963

「若き日の上田敏・日本文学における西洋文学の学び方」東洋大学大学院紀要 7 1971

〔その他〕

自筆原稿、写真

夏休み貸出について（白山・朝霞）

期間：7月4日(月)～9月14日(水)

冊数：一般学生3冊，大学院生・卒論用5冊

貸出：

(白山)

貸出日

返却日

7月4日(月)～6日(水) — 9月16日(金)

7日(木)～9日(土) — 19日(月)

11日(月)～13日(水) — 20日(火)

14日(木)～16日(土) — 21日(水)

18日(月)～23日(土) — 22日(木)

25日(月)～29日(金) — 26日(月)

8月1日(月)～31日(水) — 27日(火)

9月1日(木)～14日(水) — 28日(水)

(朝霞)

7月4日(月)～29日(金) — 9月17日(土)

8月1日(月)～31日(水) — 20日(火)

9月1日(木)～14日(水) — 22日(木)

注意：①7月2日以前に借出の本は7月9日までに返却。継続の場合は7月4日から13日に手続して下さい。

②大学院生の場合7月4日から13日までの夏休み貸出期間中に予約者がなければ継続は可能です。

③通信教育のスクーリング生および教職講座については追って掲示いたします。



正富 汪洋—温厚な人柄

校友会会長 勝 承 夫



私と正富さんとの縁は上京して渋谷に住んだことから始まる。私はもともと東京の生れであるが名古屋で小・中を卒え、大学に入るために一家をあげて上京してまもなく渋谷の道玄坂の本屋で「新進詩人」という同人雑誌を見た。それは詩と短歌の両方をのせたりすべらな雑誌だったがその発行者が正富さんだった。

詩を志していた私は、まもなくそれを発行している正富さんを訪ねたが、そこで最初に会った友達が平野威馬雄君だった。その平野君の家で16才(かぞへ年17才)のサトウハチローと会った。

何とも腕白な少年たちで、平野君は正富さんが先生をしている名教中学の五年生だった。この中学は方々を放校になった困り者を集めた面白い教育方針の学校で、平野君は教員室に忍びこんで、正富さんの弁当のおかずを調べて教室の黒板に書いたりした。しかし正富さんは決して怒るような人ではなかった。

一口に云って正富さんはおとなしい、実直な人である。「正富汪洋全詩集」の作品でうかがわれるウツボツたるものを秘めているような人ではなかった。世界人類の福祉を願っていてもそれを行動に移す人ではなかった。私が東洋大学に入ったのは正富さんが勧めてくれたからで、当時私はいささか哲学かぶれた抒情詩人だった。

平野君も私も何となく煮え切らない正富さんに造反して、主宰者ぬきの「新進詩人」を出したりした。それでも正富さんはニコニコしていた。

ある留守の時、二階に上りこんで本棚の引き出しをかきまわしていたら、何やらこまごまと書いた手記が出て来た。どうも伝記らしい。ふたりでよんでいるうち、アッと驚くことを見つけた。そ

れには「わが妻滝野は、嘗つて与謝野鉄幹の聞に笑いしもの」とあった。これは大変とふたりは大急ぎで元のように丸めて引き出しにおさめた。

あの優しい親切な夫人にそんな秘密があろうとは思いがけなかった。その頃そういうことを噂する人もなかったし、マスコミにも表われなかったので腕白な二人も知る由もなかった。もちろん正富さんも、夫人もこの問題にはふれなかった。

今では世間周知のことで、正富さん自身も書いていられるし、佐藤春夫の「晶子まんだら」や田辺聖子の「千すじの黒髪」などの小説にも書かれているが、ほんとうに行き届いた貞淑な夫人だった。「晶子まんだら」であんな風に扱われたのは全くお気の毒というより他はない。この最愛の夫人を失った正富さんの老境は、全く孤独そのものだった。丁度「浅みどり空」という詩集が出版されたので、矢野学長と相談して出版クラブで記念会を催して、正富さんを慰めると共に過去のさまざまな非礼のお詫びをした。矢野学長は同県人で故郷の詩碑の碑文を書いているからこの記念会の中心になってもらうには最適の人だった。

翌年、麻布の広尾病院に見舞った時は、もう臨終に近く昏睡状態になって意識も混濁していた。安倍宙之助君が心を尽して看護していたが、その甲斐もなく、数日後いよいよ危なくなり「何か勝さんに遺言したいといっているから直ぐきてくれ」と家族の人から電話があったので駆けつけたが、その遺言も切れ切れでなかなか聞きとれず、今も名残り惜しく思っている。享年87歳。

◇ ◇ ◇ ◇

(写真：木犀書房『正富汪洋全詩集』より)

正富汪洋は、本名を由太郎といい、明治14年に岡山県に生れる。明治37年哲学館(東洋大学)を卒え、尾上柴舟・前田夕暮・若山牧水らと「車前草社」を結成。詩誌『新進詩人』を主宰し、後進を育成。戦後は、「日本詩人クラブ」の結成に尽力した。その間下記のような詩集などの著書がある。

- 本館所蔵の正富汪洋の著作 (911.56:MO:4)
- 『浅みどり空「詩と短歌」抄』北星堂 昭和41年 (911.56:MO)
 - 『詩集 松かげ』詩と歌謡の社 昭和12年 (911.56:MO:2)
 - 『正富汪洋全詩集』木犀書房 昭和44年 (911.56:MO:3)
 - 『明治の青春；与謝野鉄幹をめぐる女性群』北辰堂 昭和30年 (911.102:MO)
 - 『恋のゲエテ』洛陽堂 大正9年 (942.62:MO)
 - 『詩集 豊麗な花』洛陽堂 大正9年
- 『詩人 スウィンバーン』新進詩人社 昭和2年 (931.563:MO)
 - 『明治文学全集』筑摩書房 (918.6:M-2)
 - 第61巻 明治詩人集2
 - 第64巻 明治歌人集
 - 『日本現代詩大成』河出書房
 - 第6巻 近代詩3 (911.56:N-2:1-6)
 - 雑誌『創作』第1巻5号 (910.5:S-9:1-1)
 - 雑誌『詩界』第92号正富汪洋先生追悼特集号 (911.5:S-2:1-91/100)

中間報告

蔵書目録の編纂過程から

本学図書館の蔵書目録(冊子)は、昨年末第五巻の刊行をみました。当初計画の和漢書編3, 欧文書編2, 索引編2の構成を順に追ったわけですから、これで索引をのぞいて本体だけは揃ったこととなります。

三年計画が五年に、計上された予算¥4700万も最終段階では億を越えるでしょう。八十周年記念という事業名目はすでに色あせましたが、まさに事業的性格をもたなければ作業は困難であったとおもわれます。

特徴は、各巻共、叢書、記念論集などに詳細な内容を列記したことです。もとをたどれば目録系の長年にわたる記載の蓄積を拝借したまでです。これに応えるためにも個々の著作、論文からの検索が出来るよう索引の充実が今後の課題になっています。

蔵書目録の意義はいくつかあるでしょうが、今は、27万冊の蔵書を5冊で一覧出来、2冊の索引で探せるという利点を活用していただき、既設のカード目録と共に御利用いただけることを願っています。

作成の主旨は、一館の蔵書を目録を通して皆様とわかちあおうということですからこの利点にかかわって可、否が問われることもあります。

ひとつは目録は蔵書構成を反映するという事です。目録が如何に形態的、技術的にすぐれてい

ても、蔵書内容が貧しく、アンバランスであればあまり使われません。また一大学、一機関の蔵書に限りがありますから、目録の編纂も広いネット・ワークを組んだ上での分担蒐集や刊行が背景にないと、これからは多額の経費と時間を費やしたとしても成果があがらないとおもいます。

今後の見通しをたてるために作成基準を考えてみました。もっとも動機は別な次元からくるものでもありますが……。

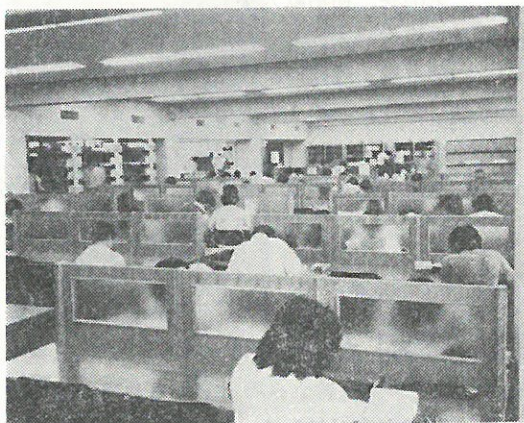
i) 特殊コレクション, ii) 特定主題の系統的蔵書, iii) 地域・連合体の合同目録, iv) 全国書誌であること, etc. (係)

※ 図書館刊行の冊子目録

- 1) 東洋大学図書館蔵書目録, 第1—5巻。昭和49—51年, 5冊(昭和47年3月現在, 索引未刊)
- 2) 東洋大学図書館増加目録, 第1—10巻。昭和34—47年。10冊。(上記Iに吸収)
- 3) 哲学堂図書館図書目録。大正5年, 1冊(円了文庫の目録, 書名索引カードあり)
- 4) 中島徳蔵先生寄贈図書目録。昭和45年。1冊。(年譜, 著述目録共)
- 5) 東洋大学購入雑誌目録。昭和42—52年。(年刊, 白山受入雑誌のリスト)
- 6) 東洋大学図書館工学部分館雑誌目録。昭和49年。1冊。(1974年現在, 川越分館受入雑誌のリスト)

朝霞分館開設によせて

(朝霞分館 鹿島 仁 郎)



朝霞校舎が開設されて2ヶ月余経過した。眼前に広がる畑地に点在する草木も日に日にその色濃くしている。これらの田園風景は騒然とした白山キャンパス周辺とは極めて対象的である。最初は強い印象を与えた朝霞の風物もわれわれの心の中ではごく日常的なものになりつつある。

分館は校舎の3階の一隅に在る。座席数132席、書架の収容能力2万冊余、他に雑誌架(400点収容可)地図台、辞書台などがある。学生数からすれば狭すぎることはたしかである。救いは、消音のためのジュータン、閲覧機など什器、備品類などが白山本館のレベルにあり、それらが真新しいクリーム色の壁、書架、隣接したベランダなどよいコントラストを成し、採光の良さから実に明るい感じを与えていることである。

利用者も多い。授業開始直後や閉館前は利用者数は多くない、しかし、昼休み時間帯を中心にその混雑ぶりは大変なものである。6月7日現在でベランダを含めると最高は307名を記録している。学生数の1割強である。平均すれば250名前後であろうか。この時間帯は連日座席数の2倍強の利用者があり、ロッカー(140名分)がうまりカウンターで荷物をあずかる数も少なくない。学内諸施設の不足も大きな原因であろうが、外国語の勉強や図書を利用して連日勉強している学生も

少なくない。

館員一同は図書館利用者の期待に応えようと努力している。少なくとも閲覧体制の強化の必要性を痛感している。一般図書はもちろん、雑誌のサービス、レファレンス・サービスの3部門の確立である。悲しいかな四月はそれどころではなかった。外部へ整理を依頼していた図書が搬入されはじめ、そのチェックや開設諸準備、昼休みの交替などでカウンターのディフェンスが精一杯というのが実情であった。五月に入り、ようやくアルバイト2名が加わり一息ついたが、完全に軌道にのせるにはまだまだ時間がかかりそうである。手前みそになるが開設準備につきもののあわただしさ、忙しさにもかかわらず、新人2名を含めて館員は連日の残業にもめげずよくがんばったとおもう。しかし、朝霞ばかりではない。白山の負担も少なくない。日常の仕事の外に朝霞用図書の受入、整理を請負っているのである。外部委託整理の後始末に6月5・6日の連休をつぶして休日出勤してくれた白山本館整理課のみなさんには感謝している。もちろん色々な形で協力をおしまないすべての館員のみなさんに対しても。

分館活動が不十分ながら始められるのも図書館関係者の協力はもとより、大学当局をはじめ各担当部門の理解と協力のお蔭である。しかし、課題は山積みしている。朝霞分館の業務体制、サービス内容の充実のために館員の努力が必要であることは論をまたない。同時に、現状ではそれ以上に、資料の充実、施設の拡充が必要である。前述したように施設の不足は決定的である。充実した資料、施設そして人員なくしては仕事にならないからである。来年以降は2年生まで朝霞へ迎える計画があると聞く。その時には教員の利用も考慮に入れなければならないだろう。開館時間の再検討も必要となる。広範な利用に対応できる施設、予算人員の充実を計らなければならない。大学関係者各位の一層の理解と協力をお願いしたい。

参考図書解題

一本 館一

環境週間（6月5日～11日）にちなんで

①環境六法一昭和51年版 (519.5:K-3)

昭和44年厚生省環境衛生局公害部で編集「公害六法」として発刊されたものですが、昭和46年環境庁が設置され47年版より編集が環境庁総務課に代わり「環境六法」と改題されました。内容は公害だけでなく自然保護、国土利用、都市計画など広く収録され、基本法毎に法律、政令、告示の順に配列されています。巻末には昭和44年版発行以来の総目録が収録され項目ごとに分類・整理されたものと、用語索引があります。また各環境法に対する付帯決議と四大公害訴訟判決——四日市ぜんそく(三重)、イタイイタイ病(富山)、新潟水俣病、熊本水俣病——がのっています。

②環境公害六法一昭和51年版 (519.5:N-3)

この図書は在野の学者、研究者が編集したものです。上記「環境六法」とことなる点は、いくつかの基本法には各条ごとに解説が付いていること、また判例篇として独立した項があり日照、環境問題の判決も掲載されています。判例には事件の概要、判決の意義などの解説があり、判決文もみやすく工夫されているところに特色があります。

③公害年鑑 '76年版 (519.5:K-4)

この図書は、1971年に環境保全協会から編集、発行されましたが、1973年版から公害問題研究会の編集に代わり、現在まで6冊を重ねています。公害問題研究会はこの図書の他に雑誌「環境破壊」も発行し、各地の市民団体とも交流した運動を続けていますので、そういう運動を反映してこの図書は、住民、国民サイドに立脚した内容となっています。全体は三部に分かれ、第一部は諸外国の公害問題としてニューヨークタイムスの記事の転載からはじまり、公害の状況、行政、自治体、企業、財界の対策が、第2部は、訴訟を含め消費者運動、労働組合、民主団体、住民運動など、幅ひろく文献、資料が収集されています。第3部の名簿、日誌篇には、公害問題100年史、全

国市民運動団体名簿、市民運動関係ミニコミ一覧、公害防止機器、装置取扱会社一覧などあり、埋もれた小さな市民団体を調べるのに役立つことと思います。

④公害関係図書目録 (519.5:Z-3)

全国市有物件災害共済会は、災害関係の図書やその他資料を集めていますが、これを内部関係者以外にも公開して広く利用させるため昭和31年に防災図書館を開設しました。この図書目録は防災図書館所蔵のうち公害関係だけを集めた和洋の図書目録です。開設後10年の昭和42年6月に発刊されて以来年一回追録の形式で出されていますが、年をおって頁数が増えています。配列は防災図書館独自の分類法に従い、巻末には索引があります。なお今年1月26、27日開かれた専門図書館協議会の「図書館作成資料ならびに図書館用品展示会」で本学の図書館利用のしおりが優秀作品に選ばれたことはすでにお伝えしましたが、この図書目録は、第4部門の蔵書目録、主題別目録部門で秀作に選ばれました。防災図書館は平河町の日本都市センター会館内にあり、日曜、祝日は休室です。

一工学部分館一

世界科学大事典(全19巻) 講談社 (403:S)

この大事典は、科学、技術の先進国であるアメリカにおいて、特に学術書分野で最大の業績をもつ McGraw-Hill 社が3年余の歳月をかけて、1960年に完成した 'McGraw-Hill Encyclopedia of Science and Technology' (略称 E S T, 全15巻) の改訂3版、1971年版を原著とした日本語版である。原著の執筆陣には、ノーベル賞受賞者を含む世界第一級の科学者2,500人以上が起用された。

内容は、例えば化学関係で亜鉛の項を見ると、その歴史・用途・含有金属・化学的性質・化合物・分析法・毒性さらに合金・冶金・メッキとそれぞれの分野でそれぞれの専門家により説明されている。科学についても同様で、生物・植物・天文学など、科学全域にわたり網羅されている。技術についても同様で、例えばアイスクリームの説明は化学的観点から、又製造工程は工学の観点から、又対敵である微生物等の汚染は生物学の観点

からそれぞれの専門家が説明している。カラー写真、顕微鏡写真、図、表、公式などで見やすく、わかりやすくなっている。

この大事典は、専門家はもちろん、科学・技術を志向する者へ、良質な情報を豊富に提供している、信頼度の高いデータベースである。

(分館閲覧室カウンター前の木製書架に配架してあります)。

日誌 (52年4月13日～6月14日)

- 4月13日 朝霞分館開館
 20日 白山, 国鉄ストのため休館
 工学部分館連絡会
 22日 逐次刊行物分科会 (於武蔵野大学図書館, 栗沢, 中川参加)
 27日 運営委員会 (懇談会)
 研修分科会 (於早稲田大学図書館, 岩田, 神林, 飯山参加)
 28日 図書選択委員会
 連絡会
 分類分科会 (於独協大学図書館, 日野参加)
 5月8日 朝霞校舎落成式, 後藤館長, 山内参加
 11日 館蔵「武稽百人一首」学習研究社刊行物に掲載のため撮影を認可する。
 工学部分館連絡会
 13日 会計監査 (白山, 工学部分館)
 レファレンス分科会 (於成城大学図書館, 崎村参加)
 14日 書誌学分科会 (於国立公文書館, 山内参加)
 17日 私立大学図書館協会東地区部会研究部幹事会 (於東海大学校友会館, 島田参加)
 18日 運営委員会
 20日 法政大学図書館長野田正穂氏他4名見学のため来館
 逐次刊行物分科会 (於慶応大学情報センター, 栗沢, 中川参加)

- 24日 分類分科会 (於国際基督教大学図書館 日野参加)
 25日 図書選択委員会
 連絡会
 研修分科会 (於東京文化会館, 岩田, 神林, 飯山, 平出参加)
 26日 工学部分館運営委員会
 31日 工学部分館電動書架案内票作成
 6月1日 工学部分館目録カード複製, ゼロックス1,000で作成開始
 4日 東京電気大学理工学部 (鳩山校舎) 開設祝賀会, 米山, 中村参加
 5日～6日 朝霞分館照合その他整理作業。
 小島課長以下整理課員応援のため出張
 7日～21日 島田謹二先生学士院受賞記念展示会 (於白山本館)
 9日 後藤館長任期満了のため退任
 10日 磯村学長, 館長事務取扱として発令
 14日 私立大学図書館協会東地区部会 (於駒沢大学図書館, 山内, 米山参加)

訂正 前号 (Vol. 11, No. 4) の記事を次のように訂正いたします。

訂正箇所	誤	正
P. 5 右側下から3行目	改定	改訂
P. 7 右側上から3行目	188 : KE	180 : KE
P. 7 右側上から25行目	10—14	1.—14

編集後記

今号 Vol. 12 より, 編集委員が変わりました。全員, 初めての仕事で, 不慣れな点もありますが, 一所懸命, よりよいニュースにしようがんばっております。今年度より大学のキャンパスが, 白山, 朝霞, 川越と3つにわかれ, 新しい朝霞分館のもようを掲載しました。『KOΣMOΣ』が, この3つの図書館を密接に結びつけていく役目を果たしたら幸いと思います。(遠藤, 小谷, 崎村, 原口, 日野, 藤井)